

を見て見ぬふりをしてノルマを強制していた。

厳冬と、言葉のわからないソ連兵との日常の中で、無我夢中で半歳近くも倒れそうになる我が身にむちを打って死線を越えてきた。そして過酷な作業は依然として続いた。

主な作業は木材の伐採と夜間の石炭おろしの重労働で、力が要るし危険な作業だった。いずれもやせ衰えているだけに、死を覚悟の仕事が続いた。そうした毎日の作業をカンボーイというソ連兵がつき切りで仕事を監視しているうちに、顔見知りもできた。親しくなつた。トリーカンという兵隊の取り持ちで、日露戦争で四国の善光寺で収容されたという民間人のかじ屋と知り合つた。片言まじりの日本語を使う。その人に励まされた。というのは、辛抱の緒が切れて逃亡しようとしたが、ふれ合いが取り持つ縁で助けられた。国境を越えた人の情け。

束縛の鎖は解かれ、我れ帰れども骨身に応える明け暮れに、今日もだれかが死んでいく。さぞかし無念であつたらうと熱い涙がほおをぬらす。生地獄シベリア

の土となりたる友をしのびて――。

シベリアにて

神奈川県 新谷 俊男

シベリアへ渡つたのは昭和二十年十一月中旬、ハラルからブラゴエシチェンスクへ。

もうアムール川（黒竜江）は雪も降り、川全部が凍つて渡河できるし、凍つていてつく寒さの中、糧秣その他各人の持ち物が入つたリュックサック（今まで使用していたわら布団の皮で各自がつくつたもの）等々満載した馬そりを七、八人で引き、坂道になると応援隊が力を貸してくれる。そりを引いて行進中、腰に下げた手拭いをソ連の子供がスケートで走つてきて体当たり、素早く手拭いを持つていく。また、その物もとろうとする。こうして入ソ、まず悲劇に遭つた。

ブラゴエシチェンスクより貨車にてシベリア横断鉄道のチタへ。チタで右タモイ左奥地とうわさされ、結

局、乗り換えて北進、終点のザゴスターへ十一月二十日ころ。ここは小さな炭坑町、部隊全部が収容された。

貨物輸送中は衛生面は悪く、水も少なく風呂もままならず、ついにシラミが大発生し大騒ぎ。途中停車地でドラム缶で湯をわかし、交替で入り、後じゅばん、袴下等々煮沸退治、なんとか収容所入りした。

収容所は未完成、まず周りを板塀で囲み、見張り櫓（逃亡を防ぐ）、便所。便所は屋外で即製の大きな深い（背丈以上）穴を掘り、その上に丸太二本ずつ渡し、これをまたいで用便する。丸太二本は数か所置いてある。昼使用は少なく、寒い夜用便する人が多く（隣り同士で話をしながら用便する人もいる。）明かりは十分でなく危険。あやまって糞尿の上に落ちた人もいました。そのうち小屋の便所もできました。食事が悪く皮をむかないアワ、キビなどが少し続くと、そのままココロコとおこしのように、このため痔の悪い人はおこしと一緒に真っ赤な血を置いていくこともあった。

黒の丸パン一個を七、八人で分けるのに正規の計量器がないので、即製のはかりをつくり目分量で一個切

り、それを基準に人数分切り計る。大きければ切りまた計る。これを繰り返し最後は屑みたいなものやりくり。みな目を大きくして見つめ、あれやこれやと分配は大騒ぎであった。

約一か月間は収容所内の整備、またいろいろの使役に狩り出され、中でも石炭の貨車積み込み。背の高い貨車でスコップで跳ね上げるのが大変だった。ピストリ、ピストリ。

最初の作業は、炭坑町で鉄道延進を図るのでその道路づくり。冬の野原を十字子で掘り崩すのですが、カチンカチンに凍っているので十字子は跳ね返り、とても掘れたものではありません。ノルマは八時間労働で一立米、一日かかっても掘れたものではありません。周りの枯れ草や枯れ木を集め燃やしその跡を掘れば少しは掘れるが、ノルマの四分の一ぐらいがやっと、そんなことで夜間作業もさせられた。カンテラあるいはトラックのライトで照らし続けても駄目、とうとうノルマは達せられなかった。

ソ連側もあきらめたのか、作業方針が変わり中止、

他の作業へ。建築及び建築に關係する諸作業、れんが造り、山小屋へ泊まり込みの伐採、炭坑の石炭掘り、炭坑工場（旋盤、溶接、仕上げ、電気、鍛工等々）。

工場関係者はみな技術者ぞろい、すぐノルマを上げ給料日にはみな賃金をもらい、帰りに引率のソ連兵の許可をもらいバザールでパン、たばこ、新聞紙等々を買ってくる。（新聞紙はたばこを巻いて吸うのに使う。）

これを見た仲間は大変うらやましがった。他の作業ではノルマを上げた者はいなかった。

何か技術を覚えなければ雑役に回されるので、私は左官になることにした。左官のノルマは天井が十八平米だと思ふ。下塗り、上塗りで仕上がりとなるのだが、難しくノルマは達せられなかったが、技術を覚えたのはうれしかった。冬の左官は、窓は板張りにし足場の下で暖炉をたき凍らないようにして作業させられた。

中隊で第一号の死者（同年齢）が出たとき、夜になつたら裸にして外に置くようにと命令された（ソ連軍医）。これには驚きと憤りと悲しみでいっぱいでした。悪い寂しい夕食時あるいは食後、アクチーブがきて

アジを飛ばし、また日本共産党紙の輪読会が開かれる。共産主義のよさ、ソ連がいかにして共産主義を達成し榮えある今日になつたかを盛んにアピールした。

二十二年に第一回のダモイがあつた。これは病弱者と、まず洗脳された者（らしき者もたくさん入つていた）。ダモイがあつてから輪読会も盛んになり、また日曜日に日ごろ威張つていた者のつるし上げがあり、こうしたことが輪に輪をかけて輪読会も盛んになってきた。しかし作業がきつく忙しくなり、作業場が方々に広がり、また炭坑は三交替なのでいつの間にか終わりになつた。輪読会にかわり、共産党のよさ、天皇制打倒、日本の貧困さ等々のニュースが流された。

生活環境が悪いため一時シラミがわき大騒ぎになつたが、炭坑が三交替ということで風呂も常時あり、生活環境もまあまあだが、徐々に改善されシラミ騒ぎもなくなつた。

部隊は二十三年六月ダモイということになり大騒ぎ、おのおの整理して貨車でチタへ。今度は来るときと反対なので、右か左か、左へ。これは本当にダモイ

だとホッと一息ついた。

ナホトカを目指し窮屈な苦しい貨車生活。待ちに待ったダモイ、なんとなく楽しく正月と盆が一緒にくると語り合ったものだ。

ところが、ナホトカで中隊はバラバラになり、私は交替要員ということで、ここでさらに一年有余ラポーチラポーチで追い回される羽目になった。

本当のダモイは二十四年九月三十日。ナホトカ出帆、十月三日舞鶴上陸、復員となった。

我が青春は

シベリア捕虜の地獄にいた

岩手県 川村 富 弥

神州不滅の皇軍が無条件降伏とは、夢にも知らざる出来事であった。

私は山神府七二二部隊から関東軍直轄二二五師団一四九連隊本部砲兵隊電気技術下士官として転属し、

終戦際に山神府からチチハルに移駐した。チチハル到着後ある日、チチハル兵器廠に出張帰営したら、すでに連隊本部は移動、留守番兵五人くらい。間もなく兵舎外に爆弾炸裂音、驚いて舎外に飛び出した途端に機銃掃射を受け、あわてて逃げまどううちにタコつぼ穴に落ちた。おかげで生命は助かったのです。

移動部隊名不明の無蓋貨車にまぎれ乗車す。歩く満人は竿の端に赤布切れをつけているのが不思議に思う。やがて明け方のハルビン駅に着いて驚いた。限りないほどの軍人、地方人の黒山の集団、阿鼻叫喚、地獄絵図とはこのこと。日本は戦争に負けたのだ。血気の多い将校ははやる心で戦わずして負けるものかと、ソ連軍に一撃を与えようと白鉢巻き隊を編成、来攻のソ連軍に備えては見たもの、結局は武装解除となり、ソ連軍の指揮下に完全なる捕虜姿となったのである。その後どこを引き回され歩いたのかは定かでない。忘れ去ることのできない幼児の死骸の山、軍馬は湿地帯に落ち身動きもできぬまま死して腹はふくれ、臭気ただよい、表現の言葉もないありさま。